

言語と世界  
— 詩人 E. E. カミングズの創造的企投 —  
門脇 道雄

40

silence

.is

a

looking

bird:the

turn

ing;edge,of

life

(inquiry before snow

( from *95 Poems* )

1・3・1・3・1行と配列される連の構成に相称がある。この詩篇には分裂していない内容語(content word)がいくつも見られる。silence(静寂・沈黙)、looking(見ている・眺めている)、bird(鳥)、edge(縁・強み)、life(人生・生命)、inquiry(質問・審問)、snow(雪・降雪)。特に、一行で独立している連のなかの silence、bird、snow は、カミングズの詩群にあって頻出する語であると同時に、この詩篇のキーワードである。

詩集73 *Poems* の作品42の原文と考えられるセンテンスは Nothing can surpass the mystery of stillness. (静寂という神秘を超えるものはない／無が静寂という神秘を超えうる) であった<sup>(1)</sup> が、silence (静寂) は内省を深め、作品を構築する原動力であり、E.E.カミングズ E.E.Cummings (1894~1962) の詩の世界における最重要語のひとつである。それは、silence という語のあとにピリオド (.) で留められていることでも明らかだ。静寂がすべてである、といった決意が覗われる。しかしながら、語のすぐあとではなく行をまたいで次の連の冒頭に現れていることでもわかるように、ピリオドは世界を閉じてはいない。むしろ、内省の世界を切り拓いている。

また、カミングズの詩群に頻出する自然界における具体的な表象は、snow (雪) である。詩集 95 *Poems* の作品41の原文と考えられるセンテンスは Beautiful is the unmeaning of (silently) falling (everywhere) snow. (しんしんといったところに舞い降りる雪の無意味が美しい) であった<sup>(2)</sup> が、雪は意味を超えた相にあり、それは己れの内省のうちにある。

静寂

それは  
眺めて  
いる

鳥

人生  
の  
分岐点

(雪降る前の審問)

見る (looking) ことは洞察につながり、それは内省へと入ってゆく。自然

界における静寂の表象が雪であり、生き物としての具体的な表象は鳥 (bird) である。見る主体が鳥という存在に託されている。内省は、しかしながら、書き手のうちにある。自然界を眺め渡す鳥の視線に、書き手は己れの内省を見て取っているからだ。つまり、詩作という営為によって、己れの内省が検証されている。

最終連の ( ) は閉じられてはいない。閉じ括弧は未だやってはこない。眺めている鳥は、人生における turning (分岐点) であると同時に edge (強み) である現在に、佇んでいる。峠を越える旅人のように、ひとは人生の輝かしい局面をも通り越して行かねばならない。生き生きとしていた世界への訣別であると同時に、しかしながら、捨ててゆきべき世界への別離でもありうるだろう。

鳥が小首をかしげるようにして問いかけている。現在に佇んで、すでにあつた時間 (既在) と将に来るべき時間 (将来) を、賢しげに振り返り展望する鳥がここにいる。問いかけているのは、現在にある存在のありようであり、自己が佇む現在の意味である。夏から冬へと季節が移行するように、灼熱の時から氷雪の時へと世界は移行しなければならない。つまり、雪が降る前の審問は継続中であり、それは閉じられることなく現在を進んでいる。つねにひとは前へと進む界にあり、内省することによって実存しうるからだ。次の詩篇もまた、その理を顕している。

43

who(is?are)who

(two faces at a dark  
window)this father and his  
child are watching snowflakes  
(falling & falling & falling)

eyes eyes

looking(alw  
ays)while  
earth and sky grow  
one with won

der until(see

the)with the  
bigger much than biggest  
(little is)now(dancing yes for)white  
ly(joy!joy!joy)and whiteliest all

wonderings are silence is becom

ing each  
truebeautifully  
more-than-thing  
(& falling &)

EverychildfatheringOne

( from *95 Poems* )

1・4・1・4・1・4・1・4・1 行と統一された連構成のなかに、カミングズの詩世界におけるキーワードが散りばめられている。snowflakes (雪片)、eyes (眼)、watching (観ている)、looking (見ている)、now (今)、silence (静寂)。つまり、この詩篇は、前掲の詩篇の変奏曲と言える。

雪が大地に舞い降りる。空が大地とひとつになるように、雪は降りつづけている。そればかりではない。舞い降りてくる雪片を眺めている内省のうちで、父と子が共存在となりひとつの世界と向き合っている。この世界は yes と肯定されている。眼 (eyes) がそもそもの源から肯定 (yes) を内包する視覚器

官なのだ。

more-than-thing という造語に、世界の一片が覗かれる。「ものを越えたもの」は、現存在の実存しうるひとつの形態であり、形而上的なものへと誘う思念である。すなわち、内省が世界を現成する理を、more-than-thing という造語が示している。

白くなりながら世界は拡がりを見せてゆく。それは思念の浸透であり、雪という具象を超えてゆく世界の現成が見て取れる。いまここにいる父と子 (this father and his child) がこの世に存在するあらゆる父と子を表象してゆくことが、最後の一行に示されている。つまり、EverychildfatheringOne において、初めてcapitalization (大文字化) が二箇所に見れる。この詩篇の締めくくりとして、結尾に置かれていることと大文字による表記は何かしら重要なメッセージと受け取られる。すなわち、進行形を作る ing によっていまここにいる父と子がこの世に存在するあらゆる父と子を表象してゆく過程が示されており、父と子がOneとしてひとつになるこの語群のなかには世界が父と子のありようへと移行してゆく変容が示されている。

だれ (ひとり?) かな

(暗い窓辺に

ふたつの顔) 雪のかけらを

見つめている父と子

(舞い降りてくる一枚いちまい)

眼と眼

見ている

大地と空が (つい

に) ひとつになる

のを驚いて

見る

今やますます大きく  
(喜びで小躍りする雪片も  
交じって) すっかり  
白くなってゆく世界

静寂がこの世の驚異

ものをこのうえなく  
超えてそれぞれが美しく  
舞い降りて (そして  
舞い降りて

ひとつになるあらゆる子と父

吹雪ではなく舞い降りる雪へと、激動ではなく静寂へと、内省が深まりゆく。  
静寂がまさしくこの世の驚異である。それは世界を創成するからだ。静寂は、  
舞い降りる雪から時相を超えた夢へと展開してゆくにちがいない。次の詩篇に  
現れるものは、実存しうる存在の内省のうちに捉えられた世界である。

12

tw

o o

ld

o

nce upo

n

a(

n

o mo

re

)time

me

n

sit(l

oo

k)dre

am

( from *XAIPE* )

1・3・1・3・1・3・1・3・1 行による連構成に、相称が見て取れる。各連のなかにも相称があつて、(カッコの記号も含めれば) 第4連における1・2・1字、第6連における2・5・2字、第8連における4・2・4字、それに最初の連と最終の連がそれぞれ2字、というところに構成上の統一がある。そのような構築のうちに time (時、時間)、sit (座る) という分裂していない語が眼に入ってくる。世界内存在が内省を示すにふさわしい語と言える。

頻出するアルファベット o は、眼を表しているようにも見え、特に oo は両目を表している。ふた組あるのはふたりの男を示しているように思われるが、それよりむしろ自らを振り返るふたりの自己を示しているように考えられるのは、一人称の me とそれに照応する be 動詞の am があたかも独立した語

のように表記されているからである。相称を崩している第2連におけるかけ離れた o がそれを仄めかしている。自己を振り返るもうひとつの眼、すなわち o-ld-o という相称を離れた距離から眺めているもうひとつの眼が存在しているからだ。

no more が象徴するように、頻出するアルファベット n もまた作品の深層をえぐっているように思われる。それは否定の接頭辞としての n である。否定されているのは、現存在がいまある自己を超えようとする実存的存在であるからである。内省はつねに、いまある己れを超えてゆく。過去における内省はむろんのこと。

たどり着いた現在がここにある。once upon a time (昔むかし) のフレーズのなかに (no more) と否定の語句があるのは、時間を漕いで過去のいずれの瞬間にも脱自的な存在を生きてきた自己がいまここにいるからである。したがって、詩篇の最後のふたつの連に押し寄せる三つの動詞はすべて現在時制のうちにある---sit, look, dream。内省を示すこれらの動詞は、カミングズの世界のキーワードである。silence へとつながる sit は己れのいまある身体的状況を示し、この世界における世界内存在の行為を意味している。look は存在の彼方へと視線を遣る存在者の営為であり、dream はさらに超出しうる世界を見据えている存在者の営為である。

ふた

り  
老いた  
む

かし

も  
は  
や



おと

こ

た

ち

すわって

(見

つめ)

夢

みて

世界は言語によって夢見られている。世界の創成は、言語によってのみ現成され、存在者によって夢見られる、現とは異なる映像に拠っているからだ。人生が終わりに近づいている。死へと覚悟を定める存在者がいて、己れのありようをふた通りに振り返る自己がいる。描きうる大団円には、かつて夢見たありようといまあるありようのふた通りの存在が現出しているにちがいない。存在者の志向とは、つねに必ず現在あるありようとは異なるところに向けられている／いたからだ。

24

insu nli gh t

o

verand

o

vering

A

onc

eup

ona

tim

e ne wsp aper

( from 73 poems )

ただひとつの大文字である A がこの詩篇の中心にある。他の語はすべて、分断されているか連結されている。視覚的にも、小文字のアルファベット群はすべて A へと放射されており、また取り囲んでいるように見受けられる。名詞として現れる sunlight(陽射し)及び newspaper(新聞)がこの詩篇におけるトピックワードであるにちがいない。newspaper が現れる唯一の普通名詞であるゆえ、陽が射している四角の広場に一枚の新聞紙が置かれている様子を思い浮かべることができる。

A を除けばアルファベット o だけが、一字のみでの一行として強調されており、二箇所にあって見るひとの目を示している。詩篇が見られるものとしてあるように、人もまた振り返られ見られるものとしてある。

1・4・1・4・1 行の連による統一だけでなく、各連における字数の配列に規則的な仕組みが見て取れる。最初の連の insu nli gh t は 4・3・2・1 字という配列であるが、最後の連の e ne wsp aper は逆に 1・2・3・4 字という配列になっている。それに、第2連は 1・6・1・6 字という行構成であり、第3連は 3・3・3・3 連という行構成になっている。over and over (何度も何度も) に ing が添えられているのはこの行構成の統一のためである。こうして over and overing という造語は and と ing が対称的に扱われることになり、連結する接続詞 and と進行形を作る ing の両方によって継続的な

ニュアンスを作品世界に与えることに成功している。

かつての新聞、すなわち古く新しい紙 (a once upon a time newspaper)、がいまここにある。過去の出来事が現在のうちに翻っているような内省の広場のなかで、取り返すことのできない過去の出来事があつたように、隠すことのできない自己の履歴があからさまな陽射しのもとへと照射される。唯一の具象である新聞紙は己れの過去を示しており、言い換えれば一枚の新聞紙のように自己は広場に佇んでいる。

ひのひざ しのかな かへ と

ひ  
るがえり  
ひ  
るがえり

ある

むか  
し (   
むか  
し (

の いち まいの しんぶん

内省の織り成す世界が、遥かなる空から眺め渡されているにちがいない。静寂もまた、この広場に充足している。カミングズの詩篇は一幅の絵に似たところがある。彼に*CIOPW* (1931年刊) という画集があるのも頷ける。画像によるスケッチが画集であるならば、詩篇は言語によるスケッチである。ともに映像としての世界を創成する。言語と世界、そして映像と世界は、時相を超えうる、この世ならぬ実存への着手である。世界を創成する創造的企投、カミング

ズにおける言語と映像が論理的形式を共有しているのは、それゆえにである。

57

mi(dreamlike)st

makes

big each dim

inuti

ve turns obv

ious t

o s

trange

un

til o

urselve

s are

will be wor

(magi

c

ally)

lds

( from 73 Poems )

分断された語を元の形に戻せば (dreamlike) mist makes big each diminutive turns obvious to strange until ourselves are will be worlds (magically) のようなセンテンスが想定される。とはいえ、依然として語の配列に通常の統語法が働いているとは考えられない。分断されていない唯一の形容詞 dreamlike が物語るように、1・3・1・3・1・3・1・3・1行による連構成のなかで、語はむろんアルファベットもまた夢のように散りばめられている。ここにはもはや文を統語する規則も語を構成する規則も存在はしない。

しかしながら、相称はいたるところに見受けられる。たとえば、空きマスを含めれば、第2連は5・1 1・5字という配列であり、その中央の行は3・3・3字という構成。第4連は6・3・6字。第6連は5・7・5字による構成であり、さらに1行目と3行目は3・1字と1・3字という対称になっている。第8連はカッコを含めれば5・1・5字の相称をなしている。

それに、(dreamlike) によって2・2字に切り離される mist。霧は文字通り midst (中央) にカミングズの詩世界におけるキーワード dream (夢) を置いている。霧はときには大きく、ときには小さく回転して大地を漂う。私たち人間がそうであるように、霧はまるで世界内存在のように時間を生きている。霧が漂っているように、私たちもまたこの世を漂っているのだ。worlds の中央に (magically) が入り込むように、世界は神秘的にたち現れる。

すると、mist, dream, worlds というキーワードは緊密につながっているように思われる。夢のように神秘的に、そして不思議に明白に、世界はたち現れる。世界が複数であるのは、霧を眺めている存在の内省がつねに新たな世界を生成しているからだ。

言葉は沈黙をこそ伝えている。一幅の絵は、沈黙の言葉によってこそ、生成される。音はなく、沈黙の映像によってこそ、世界が立ち現れている。したがって、言葉によって生成される世界は、夢のようにある。人生がそうであるように。

霧 (夢のような) が

おおきく

そして  
ちいさく

回転する

あきらかに  
そして  
ふしぎなこと

に

(神  
秘的  
に)

わたし

たちが  
世界と  
なる

まで

カミングズの詩群に頻出する silence と dream が、次の詩篇においては silent と dreams と形を変えて現れる。また、bird は具体的に thrush(ツグミ)として現れ、自然界における静寂の表象は moon(月)として現れる。

t,h;r:u;s,h;e:s

are

silent

now

.in silverly

notqu

-it-

eness

dre(is)ams

a

the

o

f moon

( from 73 Poems )

1・3・1・3・1・3・1行による連構成のなかで、とりわけ最初の一行が眼に入る。セミコロンを中央に配し、8つのアルファベットがひと文字ずつ規則的にカンマ・セミコロンの (;,;,;) と2回反復されて区切られている。8つのアルファベットは、thrushes (ツグミ) の鳴き声のように聞こえてくる。しかし、つぐみたちは今は押し黙っている。月の出ている時刻に夢みがちに佇んでいるからだ。

Thrushes are silent now. (ツグミたちは今は沈黙している) —それがすべ

てである。しかしながら、ピリオド (.) はセンテンスの直後には来ない。詩篇40 (from 95 Poems) と同じように、むしろ行を超えて新たな連の冒頭へと置かれる。すなわち、文や語は、休止を呼びこむことがあっても、閉ざされることはない。それはいつでも世界へと開かれている。己が生命がそうであるように。

この詩篇においても、分断された語を元に戻しても、センテンスがたち現れることはない。アルファベットが語を形成するのではなく、ある種の絵画を示しているように思われるからだ。しかしながら、キーワードならばくっきりと現れている----thrushes (ツグミ)、silent (押し黙って)、now (今)、dreams (夢)、moon (月)。これらの語群を除けば、他の語はある種の機能語として働いている可能性がある。いくつかの造語や副詞こそが世界を修飾する働きをしているように思われるからである。たとえば silverly は、silver の形容詞形 silvery (銀のような・音色の澄んだ) に変化することなく、ly をつけ文字通り副詞化されて「銀色のように／澄んだ音色で」の語義を示している。逆に quiteness は、quite (すっかり) という副詞の名詞化をねらったものと考えられる。この語はカミングズのキーワード quietness (静寂) とほとんど見分けがつかない。

第6連のアルファベット群は何を示しているのかが不明瞭である。しかしながら、この三行は a が頭を表していて、ツグミが何かにとまっている様子を形象しているように見える。それはおそらくは月 (moon) の左上に、である。すると、第6連は形象としては上弦の月を表しているようにも考えられる。

語として想像するならば、第6連と次の第7連には、a と the という二つの不定冠詞と定冠詞を読み取ることができ、前置詞としては at と of を認めることができる。冠詞が結びつく名詞としては、the は moon を、a は dream を想定することができる。すると、ふたつの文が立ち上がってくる— it is the moon と it is a dream。つまり、ツグミが佇んで月が出ている情景は、夢のような世界である。

そして、場所を示すふたつの前置詞 at と of は moon を目的語に取って二様に情景を表している。それは、夢の複合的映像を示していると同時に、創造の複合的視座のありかを顕している。また、silver には「雄弁な」という語義



もあることから、静寂（silence）は雄弁（silver）にさえある意味では補完されている。

こうして、作品は視覚においても意味においても、重層的に構築されている。作品の視覚的意味的な重層性こそが、カミングズ作品の特質を示している。

ツグミたち

今は

押し

黙り

銀色に澄んで

すっかり

ではなく

雄弁に

（それは）夢

上

弦）

の

（それは）月

次の詩篇においても、moon, dream というキーワードが形を変えて現れる。

mOOOn Over tOWns mOOOn

whisper

less creature huge grO

pingness

whO perfectly whO

fLOat

newly alOne is

dreamest

oNLY THE MooN o

VER ToWNS

SLoWLY SPRoUTING SPIR

IT

( from *No Thanks* )

4・4・4連と整っている構成のなかで眼を表すかのようなアルファベットOとoが視界に入ってくる。capitalization（大文字化）の規則がきわめて明快に示されているからだ。すなわち、第1・2連ではOのみが大文字であり、第3連では逆にo以外が大文字である。すなわち、Oとoを軸にして、陰画と陽画のように情景が反転している。カミングズの詩の創造に特有の技法、すなわち相称という形式がこの詩篇にも現れている。ここではそれは、大文字中心の世界と小文字中心の世界によって示される、陰画と陽画という相称である。

そればかりではない。画像の相称を、個々の語もまた支えている— less と huge、それに slowly と sprouting。less（より小さい）という形容詞は、creature（生き物）をめぐって、huge（巨大な）という形容詞と対称をなす。slowly（ゆっくりと）という副詞は、spirit（活力／精神）をめぐって、sprouting（急速に出現する）という現在分詞と対称をなす。

moon が形を変えて3回現れ、風景を表す towns が形を変えて2回現れる。キーワードの dream もまた形を変えている。この詩篇では dreamest という造語がそれであり、dream (夢、夢見る) の最上級が示されているのである。それにしても、名詞あるいは動詞にも最上級があったのだ！

世界は、言語によって創造され、夢のような法則にしたがって、すなわち夢のように法則もなく、変容してゆく。gropingness もまた、造語であり、grope (手探りする、まさぐる) の現在分詞形の名詞化と考えられる。語形変化は、語における語義の変容を示しているばかりでなく、作品の重層性を象徴的に示している。世界はいまだ未到の相にある。ちょうど未知の語がいつでも創造される磁場にあるように。

町の上に

ささやく月

小さな生き物

大きな手探り

孤独を新たにし

しかも十全に

漂うのは

至上の夢

月だけが

町の上に

ゆるやかに

わきおこる活力

世界は言語が語る夢である。名詞と動詞が情景を夢のように生成する。名詞が示すものは、沈黙の画像に描かれる、夢の投影である。したがって、月も町も画家によって示される、己が世界の心象である。静寂のうちにあり内省が、世界を創成する。ただひとつこの宇宙に漂う月のように、自己もまた無数の町

を漂い流れていく。世界はいまだ未到の相にある。なぜなら、存在者はつねにその生存のありようを模索しているからだ。詩篇における動詞が存在者の生を未到の相へと誘導している。囁き (whisper)、手探り (grope)、漂い (float)、現れ (sprout)、夢見 (dream) ながら。

世界は漂い現れる相をつねに志向している。創造される世界は、躍動を志向してやまない。世界があるという一事が神秘である。カミングズによる創造的企投とは、現存在が宇宙にあるという神秘の体現であると同時に、言語が世界を現成するという神秘そのものの体現である。

#### [原文の詩篇と訳文について]

本論に提示された作品は、*E.E.CUMMINGS COMPLETE POEMS 1904-1962* Edited by George J. Firmage, Liveright. 1991 より引用。日本語への訳出はすべて筆者による。

#### [注]

- (1) 門脇道雄「美、あるいは規範からの飛翔—詩人E.E.カミングズの言語世界」『東北公益文科大学総合研究論集第10号』東北公益文科大学、2006年。pp.52-53
- (2) 同前、pp.45-47

#### [参考文献]

*E.E.CUMMINGS COMPLETE POEMS 1904-1962* Edited by George J. Firmage, Liveright. 1991  
藤富保男編『カミングズ詩集』思潮社、1997年。